

書評

稲賀繁美著

『接触形論 触れあう魂、紡がれる形』

(名古屋大学出版会、二〇一五年)

安永 愛

本書は『絵画の黄昏―エドゥアール・マネ没後の闘争』(一九九七)、『絵画の東方―オリエンタリズムからジャポニスムへ』(一九九九)、『絵画の臨界―近代東アジア美術史の怪椿と命運』(二〇一四)などの優れた大著で知られる著者による、造形芸術と文化接触をテーマとした誠に雄渾なる新著である。上記三作と同じく名古屋大学出版会より刊行されており、八木一夫の陶芸オブジェ作品『信楽土管』の手触りまで感じられるカバー写真が目を引き美しい造本である。

本文は「素足で歩むということ」と題されたプロローグに始まり、二段組三五三頁が以下の通りの三部構成となっており、別途、一二一頁に及ぶ索引と注が付されている。

第一部 遠近の彼岸―華嚴的パラダイムの可能性

第二部 記憶の器―「うつわ」と「うつろい」

第三部 触知の復権―肌触りを研ぎ澄ます

まずは、本書の構成に添い、多彩なテーマを包含する本書の骨子を紹介しよう。

第一部第一章「華嚴経と現代美術―相互照射の試み―」では、西欧において支配的だった機械論的な因果論を超えるパラダイムとして、差異が差異を照らし合わせ融通無碍の境地にいたる華嚴経の思想が、現代芸術の実践の中で一つの拠り所になったことを、数々の作品の分析を通じて浮き彫りにしている。ナム・ジュン・パイクや赤瀬川原平らの試みに混じって、『ゲゲの鬼太郎』に現れるあの世とこの世をつないで映像を提供する「霊界テレビ」なるものも、華嚴的思想の系譜に収められている。第二章「陶藝と彫刻とのあいだ―八木一夫と造形芸術―」においては、有用性を旨とするジャンルである陶芸から出発し、有用性から脱し、自然の偶然性を取り込みつつ、純粹なおブジェへと到達する八木一夫(一九一八―一九七九)の営為が、創作主体のミメーシスに近い文体で語られる。第三章「彫刻から世界の織物へ―エル・アナツイと布地―」は、アフリカをルートとするエル・アナツイ(一九四四―)の創作における、有用性と日常性のジャンルである織物から、彫刻的オブジェへの変容が観察される。近代社会の生み出す廃棄物を織りの素材

とすることでリサイクル的コンセプトをも包含し、芸術行為と物資の廃棄とリサイクルの問題系を重ね合わせる現代芸術の一方論が示される。第4章「異界接触論―「作品」とその外部との界面を探る―」では、作品における様々なる臨界の数々を探る試みが活写される。少女を性的対象とした猥褻作品ではないかとして、バルテュスの代表作「夢見るテレーズ」をニューヨーク・メトロポリタン美術館より撤去すべしとの署名活動が起こっているとの報道は記憶に新しいが、本章ではバルテュスの数々の少女像の意味も、聖性の微のもとに再解釈され、猥褻Ⅱ展示禁止という短絡を止まらせる、知の枠組みを与えている。第5章「時の揺籃、魂のうつろい」においては、芸術や文化現象を捉えるための方法論として、気象学モデルや地学的想像力の有効性が、高らかに謳われている。また、それが東日本大震災という未曾有の災厄に立ち会った者のうちに孕まれた切実な方法論でもあることが理解される。本章の注には、学術書としては異例のことだが、二〇一一年の震災の後、著者の意思とは関わりなく口をつけて出てきたという（強い情動に突き動かされてということだろうか）震災による死者をめぐる思いと、自然の猛威による災厄を文明の転換点として織り込まざるを得ない風土に生きる者としての文明論的というほかない歴史の俯瞰意識から生まれたと思われる、しかし銜のない言葉による、

鎮魂と再生・投企への思いが宿された一種の詩が掲げられている。注によれば「香港での学会で求められ、東日本大震災について即興発言した直後に、筆者自身の意思とは無縁なまま、脳裏に去来した言の葉、胸中の井戸に、ひとしれず湧き昇ってきた、幾つかの水泡の群れである」という。この詩は「生き残るということ」と題され「個体の生死を越えた命の連環―そのなかに個の尊厳が宿る。」という詩行で閉じられている。この詩は、本書の目次ともに、英訳・仏訳されて巻末に置かれている。

第Ⅱ部は「記憶の器―「うつわ」と「うつろい」と題され、第1章「うつわ」と「うつし」において、岡倉天心『茶の本』（一九〇六）の射程を測りつつ、空虚を抱くゆえに、転生と豊穣化を可能とする文化触発のパラドクスルな様相が理論的にスケッチされる。第2章「奈落と渦巻―翻訳の運命について―」においては、翻訳の営為を接触変成現象と見て、西洋起源の「哲学」が所謂「東洋哲学」と出会う接触面において生じた諸現象が描写される。中でも、西洋哲学の語彙が漢語世界とどのように接続したのかについて、さしたる説明も考察もないままに、多くの翻訳語たる抽象名詞が定着した日本の近代化初期における、一種盲目的な文化受容のもたらした事態に関する指摘が印象的である。続く第3章「形の生命とその継承―伊勢神

宮の遷宮をめぐる―」は、美術館に収められ、あるいは文化財に指定されて変化を止め、いわば屍となった文物や建築を愛でるといふモデルとは対極的な、プラトンの「エイドス」すなわち純粹理念としての「形」が継承される、伊勢神宮の二十一年ごとに遷宮という思えば誠に不可思議な文化継承のありように光が当てられる。第4章「胎児における風土性―三木成夫再読―」においては、解剖学者、古生物学者として知られた三木成夫（一九二五―一九八七）の名著『胎児の世界』を手がかりに、発生学的な記憶にまつわる三木の思索と、「旋風としての自己」という著者自身が提唱する創造にまつわるモデルが縫り合わされる。生物の発生学的な見地からすると、専ら前頭葉の働きの注視に止まる創造をめぐる議論の限界があらわとなる。生命記憶の夢とその軌跡にまで、創造や表現の世界の起源が辿られるのである。続いて第5章「遺伝情報報の繭に包まれた蛹はどんな夢を見るか?―工藤哲巳と「不能哲学」―」は、長くバリで活動し、欧州の人間中心、人権中心の思想に挑発を試み、「人間の崇高さ」という観念をあざ笑うかのごとく、核の脅威に晒されている無残な人間のありようを強烈な批評意識のもとに醜怪とも見える造形にもたらした工藤哲巳（一九三五―一九九〇）の表現活動が精細に読み解かれる。

第Ⅲ部は「触知の復権―肌触りを研ぎ澄ます」と題されている。第1章「触知的造形の思想（史）的反省にむけて」では、再び岡倉天心の『茶の本』が取り上げられ、二十一世紀における同書のアクチュアリティが、「手」の働きや「手触り」をキーワードとして素描される。第2章「物質性よりのぼる精神の様相」では、夏目漱石『夢十夜』の第六夜が召喚される。仁王を彫るとは、木の中に埋まっているのを鑿と槌の力で掘り出すことだ、と豪語する運慶に倣って男は木を掘り始めるが「明治の木にはとうてい仁王は埋まっていけないものだ」と悟ったと吐露することで結ばれる話である。この話を枕として、あらかじめ頭脳の中にあるアイデアを素材との交渉、戯れの中で形が生まれようとしていくという、もう一つの創造の道筋が提示される。第3章「蘇生する化石、跳梁する魂」は、京都大学総合博物館で二〇一〇年に開催された『物からモノへ…モノ学・感覚価値研究会展覧会』の意欲的な試みについての詳細なフィールド・ノートである。博物館に現代美術作品を持ち込む、というこの展覧会における実験的な試みによって炙り出されてきた、文化をめぐる様々な通念とその揺らぎが描出されている。第4章「近代造形と素材の魂―石井鶴三の「木取り」と「形のデッサン」―」では、原料となった木材の中から彫像が刻み出される過程、

すなわち、最初の木取りを定める線が木材の表面に引かれた段階から完成に至るまでが順を追って写真に残されている。石井鶴三（一八八七—一九七三）による島崎藤村の木彫坐像の創作に迫る。石井は、平柳田中をはじめとして、木彫において広く用いられていた、塑像に計測器の先端を当て、それをそのまま木材に当てることで、対応する点を記していく「星取り法」という方法を取らなかった。周到かつ大胆に木材から切り取るべき部位に線を引き、思い切りよく不要な部分を除き基本形を得る石井鶴三のアプローチは氣迫に満ち、円空を彷彿させる。勢いの触覚が生命の基本線を生む、その様が注視される一章となっている。最終章である第5章は「工藝の将来あるいは「ものづくり」再考—テクノ・アルスTechno-Arsにむけて—」と題されている。この章では、明治以降、欧米近代の価値観に沿って「美術」という範疇からは排除され、他方で急速な進展を見せた工業技術・機械生産にも取り込まれることもなく、「二重の否定が重なりあった部分、二重の疎外を蒙った領分に与えられた他律的な名称」（三三二頁）である「工藝」の意義が問われると共に、その未来に向けての可能性が、身体技法がアウトソーシングされる傾向にある現況を踏まえながら、「ものづくり」という開かれた領分へと落とし込みつつ素描される。「もの」の手に宿る価値と、その遺産の継承を祈念して、論考

を意識し、またそれぞれの作家の創作活動全体の志向を正確に受け止めるためには、ともかく相当数の作品に接しなければ事は始まらない、という事情が腑に落ちてきた。神格化も厭わず一つの作品に沈潜し徹底的に読み解くとき眼差しも時に必要であるが、多数の作品の連関の中において、初めて見えてくる創造行為の相貌や意義というものもある。そこに文明的な流れ、生命的な継承とも言うべきものが仄見えてくることもある。そこに著者は照準しているように思われる。

この書は、広く文化や芸術に関心を寄せる者にとって、そして出会いや接触が紡いでいく創造や文化の営みに一端でも関わる者にとって、豊かな気づきをもたらしてくれる書物である。本書には、克明に注記が施され、またその注記に掲載された膨大な書物や作品が、読者をあらたな思索へと誘う。注記は、自説の論拠を強化するのみならず、新たな問題系へとつながる開かれたものとなっている。注記の一つ一つに、雑誌論文の一つは紡げるほどの問題の所在が示唆されている。これは、まさしく文化的な「散種」と言つてよい事態なのではなからうか。わずかにページに凝縮された本書のあとがきには「年輪的にも、また勤務先の行政的な業務責任の質量から見ても、筆者に今後、本書に匹敵する規模の出版企画を実現できる可能性は、もはや低いものと見た方が賢明であろう。やり残した幾多の課題

は閉じられている。

本書のプロローグ「素足で歩むということ」には、現代美術の現場と人文学を渉猟しつつ、国名や時代名などで特定されるようなフィールドに自らを限定することなく知の沃野を歩むことの宣言がなされているのだが、筆者の思考の導きの糸となっているのは、長年積み重ねてきた台氣道の経験であったことが注目される。書齋、図書館、美術館に身を浸すのみならず、道場で経験を積み重ねたことが、既存のオーソドックスな美術史や文化史の綺麗な図式には収まらない、沃野での歩み、様々な越境を可能にすることにつながっていると見受けられる。身一つ携え、呼吸を深くし、周囲の氣配を察知する敏感なセンサーで、創造の現場へと赴いていく著者の方法論が宣言されたプロローグである。

本書には、夥しい美術作品の図版、写真が掲載されている。著作権にまつわる対応も並大抵の作業ではなかったであろう。筆者は、大学院時代に著者の研究発表を拝聴した際、あまりにもめまぐるしく多数の作品が取り上げられ、一つ一つに充てられるコメントの時間が細切れになってしまふことに、創作過程への敬意の欠如を感じ、釈然としないものが残ったことを覚えているのだが、それから四半世紀を経、本書を手に、意を尽くした叙述を辿つてみることによつて、個々の作品の創造の文脈

については、次世代の有意の読者が、本書の意思に遺志を継いで下さることを祈念しつつ、筆を置く」（三五三頁）と記されている。著者の遺稿も待たずして記された言葉であることを思えば、いささか寂しく、いや、まだ老齢に差し掛かってますます豊かな、刮目すべき仕事をなさる、比較文学会の諸先生方の系列に連なつていただきたい、否、連なる方であると思わずにはいられないが、著書の意志を継ぐ次世代の人々が現れるなら、文化研究の未来は一層豊かなものになるであろう。

さらに付け加えるなら、本書は、人文学を専門とする研究者に実りをもたらすという位置付けに留まるものではないと筆者は考える。著者生来のサーピス精神によるのであろうが、若干饒舌に傾くが、古典的な骨格を失わない凛とした氣韻ある文章は、次代を担う、広く若い人々にも触れていた、だいたいものである。人文諸科学、さらには自然科学の最新の知見をも折り込みながら、作品や事象の立ち現れを稠密かつ大胆に論じ、我々の生きる現場へと差し戻していく思考の強剛さ、健やかさは、どのような道に進み、活動することになろうとも、一つの導きとなるのではないだろうか。本書は、ある種の明るさに包まれている。それは、批判と破壊を伴いながらも、全体として肯定し存続し、深いところで楽天的な文化の営為を、力強く言葉に刻み込んでいるからであろう。広く、縦読を勧めたい。